

浄土

1984-8

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十八日
昭和五十九年七月二十五日印刷
第三種郵便物認可
（特別授承認雑誌）第三五号
昭和五十九年八月一日発行
第五十卷
八月号



こころがみ



舞見御中署

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇一	大正大学	電話(〇三)九一八七三一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六	佛教大学	電話(〇七五)四九一一二四一代表 通信教育部 四九一一〇二三九	学校法人 大乘淑徳学園 淑徳短期大学	理事長 学長 長谷川良昭	〒174 東京都板橋区前野町五三—七	京都文教短期大学	学長大橋俊有	〒611 宇治市槇島町八〇
埼玉工業大学	松川文豪	淑徳中学校長 淑徳高等学校長	里見達人	〒174 東京都板橋区前野町五一四—一	鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長	上田祐規	〒862 熊本市九品寺三一—一	学校法人 芝学園 理事長	豊岡益人	学校長 徳久鐵郎	
東山学園長	石井俊恭	〒606 京都市左京区永観堂町五一	上宮学園	理事長・学園長 鵜飼隆玄 高等学校長 鵜飼光順	〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一—六	神田寺(旧法禪寺・安良寺) 学校 真理学園・神田寺幼稚園	友松諦道	〒101 東京都千代田区外神田三一四—二〇 電話(〇三)二五一八六八三—五	法然上人降誕聖地 美作誕生寺	岡山県久米郡久米南町 電話(〇八六七)二八一—二〇二	

八月号



其れ衆生ありて、斯の光りに遇
うものは三垢消滅し、身意柔軟
なり。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

——法 話——

施餓鬼会に想うこと一統……………北 邨 謙 順……(2)

いのち尊し(一)……………成 田 光 俊……(7)

——与えられたるもの——

谷崎潤一郎の書の偽物語……………近 藤 良 貞……(12)

《世相評談》

健康の涼風……………大 室 了 皓……(18)

心のはなし(下)

「因果」ということば……………曾 田 文 雄 ……(26)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第2回……………寺 内 大 吉……(31)

前章・絶唱の経典(二)

挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一 田 牛 猷 選……(24)

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

施餓鬼会に想うこと

続



施餓鬼会に、かならず伴う作法があります。
その中の一つに「水向け」の作法があり、
「施食」が行われます。

盂蘭盆の精霊棚にも用意されるのが、本来の飾り方だと存じますが、今日では如何でしょうか。施食は変食の作法がありまして、棚経の際にお寺さまにして頂きます。水向けの作法も同じですが、忘れられてきているようであります。先祖代々がつとめて伝えて今日

きたむら けんじゅん
北 邨 謙 順

(大本山光明寺執事長)

まで幾百年でありましょうか。そのいわれを尋ねて見ますと、やはり、往生要集がその大事なはたらきをしておるように存じます。

その餓鬼道の条項に示される所によりまして、幾種類もの餓鬼があつて、大体は今生の悪業の結果として、飲と食の苦しみを受けます。所が絶命寸前のものが生き返ることがある。それは次の場合であります。

「或は人の水を掬して、亡き父母に施すあら

は則ち少分を得て、命存立いのちぞうりつすることを「得」というのであります。少分というのは少しの水が頂けることであります。そして又「世の人の亡き父母のために、祀まつりを設ける時、得て之れを食う」と出ております。これはまさしく盂蘭盆の施食に該当いたします。この事は、正法念処しやうぽうねんじょ至に説かれてある由でありますが、施餓鬼にせよ盂蘭盆にせよ、施食の外に法施の回向が行われますが、それが出て参ります。「人の願によりて法を説く時、これによつて力を得て活命かつみょうす」であります。活命は命をとるもどす、活きかえる意味であります。活命して元氣が出て、餓鬼道の苦が続きますが、その悪業の因果を断じて楽果に導くのが仏法でありますから、仏法僧の三宝に帰せしめて悉く仏果に向わしめるのであります。その場合、「一切精霊偈いっさいしやうれいげ」が唱えられますが、この偈は大毘盧舍那經と般若理趣經から取り入れた偈でありますが、鎌倉の光明寺では、この偈文は、八代觀音祐崇上人の作と伝えており

ます。或は前掲の二經から上人自ら作られて回向文とされたのでありましようか。上人は毎日この偈文を誦して六道の精霊に回向されたと伝えております。世人、上人を仰いで、地藏菩薩の化身だと拝んだといひます。地藏菩薩は六道能化でありますから、故なしといへません。因よなきに祐崇上人は淨土宗十夜法要の始祖であります。

さて、その文は、

一切精霊生極樂 上品蓮台成正覺

菩提行願不退転 引導三有及法界

(一切の精霊、極樂に生じて、上品蓮台に正覺を成じ、菩提の行願、不退転にして、三有及び法界を引導せんことを) (三有は欲有・色有・無色有の三界、法界はすべての世界)

さて、孔子さまは「惻隱そくいん」の心と申されましたが、隠と申された心ばえが胸を打つのであります。隠は、かくれている・見えない・かげにある意味でありましよう。思いやる・気くばり等と近い意味の言葉があります。

これは相手が目に見えている分も含れる。むしろ、その方が強いかもしれない。ところが側隠というのは、目に見えぬものに思いをかける意味でありますし、更に側はいたむのであります。辞書では隠も深く痛む意と出ますが、その切に痛む心の行く先が目に見えないものに及ぶという、その所には実は施餓鬼の心を見るのであります。その思いをたたえて施餓鬼や盂蘭盆に臨みたいと存じます。

昨日、藤本義一先生の講演の記録を読みました。沖縄で取材された時、毎日ゴボウを洗っているおばあちゃんに会った。戦争体験を聞かしてくれといったら「何もない」と言った。話し出したのは、艦砲射撃に追われて南から北へ、生まれて三カ月の赤ん坊をおぶり、五歳の男の子を連れてハダシで逃げた。主人は赤ん坊の顔も見ず南方で戦死した。五歳の子が腹が減ったという。それでも先に赤ん坊にオッパイをやれと言う。ではというので後ろを振り返ると、首がない。爆風にやられた。

その首を年に何度も探しにゆくという話です。話すことなど何もない、というお婆さんから、すごい戦争下の体験が出てくる。そして子供の首を何度でも探しに出る母親の心を思う時、私は胸の中が熱くなってくる。もとより私共もその首が飛んで母親の背中に息たえた赤ん坊の冥福を祈らずにはおれないし、この苦しみを何事もない顔で生き続けている母親の上にも幸多きを祈りたい。これが施餓鬼の想いかもしれない。

昨年亡くなった小林秀雄さんの講演の遺稿が、昨年8月の「新潮」に載った。「信ずることと知ること」という題名で。信ずるということは責任をとることだと。よく思索すると成程そうです。信ずることは責任をとることです。信ずる力を失うと責任をとらなくなると。現代のインテリは反省がないと。なかなか厳しい。反省がないというのは信ずる能力を失ったことだという。

それで昔の人の話がでる。美濃の国のある

囚人の話です。山の中で炭焼きの生活。貰い子が二人いる。かみさんが死んでこの男と二人の子供との暮し。子供は男と女と同じ位の年で十三。炭が売れなくなる。無一文で帰る日が続く。ある日、家の中をのぞくと子供が二人でナタを研いでいる。小屋へ入ると二人は土間へゴロンとねていった。「オトウ俺たちを殺してくれ」。父親はクラクラしたが、そのナタで二人の首を打ちおとす。自分も死ぬとしたが死にきれずに自首する。

二人の子供の心にあるものは、食に飢えてきた時、俺たちが死ねばおとつあんが助かるという気持ちで一ぱいだったのだ。小林秀雄さんは「本当の人間の魂を感じる。これは私共にも響いてくる感動でもあります。私共が感動すれば、その子の魂はきつとどこかにある筈です」と結んでおられる。真剣なまなざしで言っておられる小林秀雄さんの心が伝って来ます。「感動すれば魂はきつという」という実感は何ともいいようのない感銘です。

ところが気がついて現実に戻ると、現代のどこに魂の感動があるのだろうか。藤本義一さんは、心をよくはたらかせないから年をとるにつれて、心がすたれて、出てくるのは、悪口とグチばかりになるのだ、と仰しやる。人生の中に生活があると錯覚しているからで、生活の中に人生を見詰めていこうという姿勢があれば生活そのものがだるくなっていけない筈だ、と言っておられる。特に若い方々が仏教への生き方を学んでほしいと、切に思います。

河合隼雄先生が、昨年の12月6日、毎日新聞の夕刊、「展望欄」に「たましいの復活」という題で、ユング派のジェイムス・ヒルマンの主張を書いておられます。たましいというのは定義できない言葉ではあるが、意識をはるかに超えた存在で、人間が死んだ時にあの世にもつていけるもので、このたましいの形成こそ、今必要ではないのか、という主張であります。ヒルマンによれば、こどもの心

は、たましいに近いはたらきを示すが、大人になると遠くなってしまうと。そして河合先生は7日の夕刊で、頻発する少年暴力について、その背景には、たましいへの希求がひそんでるのではあるまいかと結ばれてある。

私は今日のやかましい教育論議は要するに外面論で、右のような内側の視点があってよいと思っています。外側からの教育論も大事です。けれども、子どもたちの内面を見すえた視点があってよいのです。そこから、大人は、親は、先生はどうあったらよいのかを考えたらよいのではないのでしょうか。人間の根本に摂取不捨の教育観・人間観・衆生観がどつしりと据ったところから出発する必要があると思います。皆さんはいかがでしょう。

玉城康四郎先生が大法輪58年6月号に「世界全体が物質化していく轟々たる洪水は、新鮮なる精神（先生は「たましい」の代りにこう書かれた）の鏡には耐え切れず、悪魔を消し去るという狂鬼の形で発出してしまったのでは

あるまいか」と述べられたと同じ方向で指摘されているように思えます。

ひるがえって思えば、私共は深い反省もなく、たましいの所在も分らず、人間の仮面をつけて、実は群れをなして餓鬼道への街道を押しあい、へし合い歩きつづけているのかもしれない。悲しいことに仏教を聞いても感動がないのです。

念仏のいわれも観念で頭の中だけです。生きた生命が出てこない。打ちこめない。感激がない。その場で適当に暮して生きている。美濃の子どもや沖繩の老婆に対してはずかしい。けれども世界の趨勢は表裏あやなして、たましいの希求を模索していることには間違いないのです。そしてこれに答え得る道は、宗祖によって開いて下さった念仏の中にこそあるのだと信じます。皆さん共に励まし合って参りましょう。

（前月号訂正

三頁下段三行……党や……）
（八頁下段十八行……言受）

(法)

(話)

いのち尊し(一)

与えられたるもの

成田光俊

(横須賀市専福寺住職)

精進こそ不死の道

放逸こそは死の道なり

いそしみはげむ者は

死すことなく

放逸にふける者は

生命ありとも

すでに死せるなり

法句経の一節ですが、あじわい深い言葉だ

に思います。

第二次世界大戦らしい、科学の発達はめざましいものがあります。人間を、夢のふるさとであつた月に送ることが出来るようになりました。その人間自体のスタートも、自然の妊娠だけでなく、先天性異常児の誕生や遺伝子操作が行なわれはしないだろうかと危惧する倫理的な問題を別にすれば、体外受精にもよるようになっていきます。いずれにしても受精は、親から子への遺伝子の伝達をする鼓

稗な儀式です。生命の出発点とも言えると思
います。その儀式によって、遺伝子が時間的
な流れのなかで生れ、ある時は滅びながら、
親から子、子から孫にと永遠の生命を伝えて
いくのです。いいかえるとそれぞれの尊い生
命は、この世の中で二人としない独自の存在
と言えます。そこに生命の神秘があるのです。
その生命を守りつつ、成長させてゆくことが
わたしたち人間に与えられたもののなのです。
ところが、それを否定するようなモラトリア
ム傾向とか、ビーター・パン指向という言葉
が、ここ数年はやっているようです。

「子どもは、だれも大きくりますよ。ビ
ーターだけは別ですが……」これは子ども達
が夢をふくらませ、ここ数年、歌手の榎原郁
恵が演じているジェイムズ・バリの童話ビー
ター・パンの書き出しです。少女ウェンディ
の美しい姿に、母親は「いつまでも、この
ままでいられたら」と、思いをはせたもので
した。「いつの日にか母になってほしい」と

思いつつも、世の親たちが一度は娘にいたく
幻想なのかも知れませんが、でもわたしたちは
尊い生命として誕生してから、幼児、少年、
青年……へと成長します。それは誰れも拒む
ことが出来ない現実なのです。にもかかわら
ず、いつまでも責任ある大人になりたくない
という考えを持つ方々を、モラトリアム傾向
やビーター・パン指向といっています。この
ような考えを持つ青年がいることは悲しいこ
とです。

現在のような複雑な社会機構の中で、そこ
から逃げ出したい気持ちには解るような気がし
ます。しかし科学が発達することによりコン
ピューター社会が出来、一そう「管理強化」
になってきます。機械文明の社会は、コンピ
ューターがなかったら仕事が出来なくなり、
ことによつたらパニックになるかも知れませ
ん。皮肉なことに、自分たちの力で造り出し
た科学が発達すればするほど、わたしたちは、
生活のさまざまな場面で「管理社会」の息苦

しさを感ずるようになります。しかしながらそこから逃避することも、まして埋没することが出来ないわたしたちは、自分自身をしっかりと見つめ直すことが大切だと思います。

精進こそ不死の道

放逸こそは死の道なり

わたしたちは日々生活をしていますが、この日々の中に、生きた道と死を意味する道がある、と教えられているのです。

生活にはげみ、身を浄め学ぶことは大切なことですが、もっと大事なものは、なんのためにそれをするかという、自分自身を知ることだと思います。その日々努力し学ぶことが、
“生きる”道を進むことになるのです。努力をしない人たちは、努力をやめてしまった時には、もはや死の道を進んでいるのです。“生きる”とは“活”です。いま正に活動していることをいうのです。

六月の初旬に“もうひとつの少年期”という映画の試写会に行き、非常に感動させられ

ました。この映画は、北海道にある家庭学校の子どもたちを“ガンバレ”と励まし続ける教師と一人の卒業生を中心に描いたのですが、その卒業生の一つのセリフに胸を打たれました。

この少年は北海道の日本海に面した漁村に生れ、六歳のときに父母が離婚したのです。貧困と親の離婚の中で、少年の心は乱れ、いつしか非行少年と呼ばれこの学校に入った。卒業した少年が東京で知り合った少女は、アイヌ生れというだけの理由で差別された過去を持っていた。互いに心に秘密をもち、境遇も同じ二人はいつしか激しい愛の炎を燃やしていた。だが二人を取り巻く壁は厚く、少年の肉親が少女を差別して根強く反対しました。それにせつかく勤めた少年は、交通事故が原因でクビになってしまう。そんな二人にも、新しい生命が与えられていた。

冬のある日、家庭学校を訪れた少年の家族は、教師夫妻と学校で生活している子どもた

ちとの和やかな食事をしていた。ふと食事をやめた少年が、抱いた我が子を指差しながら「家族っていいよな、こいつはオレを選んでくれたんだから」と語った言葉に、みなさんは何を感じ、なにを考えるでしょうか。

生れてくる子どもは親を選択することは不可能です。子どもが選択したわけではありませんが、あたたい家庭生活を送ったこともない。豊かでもない。苦難の道だけがある自分を選んでくれたらと思うとき、自分はどうしたらよいのだろうか、真剣に自己をみつめる姿。前向きに自分の生き方を問いつづける大切さを、少年が感じたとは私は思います。

科学が発達し文明が進むに従って、わたしたちは与えられた生命を、あたかも造り出されたもののように考えているように思えてなりません。このような考え方が、モラトリアム傾向やビーター・ペン指向を生みだしているように思えるのです。

与えられたわたしたちの生命には、大きな

使命が課せられていると思います。わたしたちはこの世に二つとない尊い生命を受けた瞬間から、多くの恵みをうけつつ生かされています。なんの遠慮もなく空気を吸っています。ものみなすべてがかつたら生きることが出来ません。そのための自然、大自然のジャングルこそ恩人なのです。その恩人に生きるために刃を向けているのがわたしたちの姿です。まったく悲しいことだと思っています。

わたしたちに課せられた使命は、自分を知ることによって、恵みを受けたものに感謝の念をもち、お互いが生かしあうようにすることです。与えられたもので、感謝の心が持てるようになると、少しはお役に立ちたいという気持が生れてくると思います。そこには、自然と責任ある大人になりたい、という愚かな気持は失せてくると思います。生きることを教えてくれた子に感謝する気持を持つことによって、家族や他の人々を生かすことが出来るのです。

いそしみはげむ者は

死すことなく

放逸にかける者は

生命ありとも

すでに死せるなり

自分をみつめる努力をしないで、ただ、息をしているだけの人間では、与えられた生命が悲しむだけです。自分が多くの恵みによって与えられたものであると解れば解るほど、いかに弱い者であるかを知ることができ、感謝し、助け合うことが出来るのです。そして、自分のなすべき仕事、使命もいきいきと、生れてくると思います。それがつねに死ぬことがないいつまでも生きつづける姿なのです。これが与えられたいのちの尊さでもあるのです。

福井県の三国町に糸田照潤先生という布教師がおられました。私は先生の教えを親しく受けさせていただきましたが、先生はいいつも笑顔で接しられ、墨絵をたしなまれ、つねに

読書をされていた信仰心の篤い方でしたが、昨年の八月十一日早朝におなくなりになりました。

私が先生にお逢いした最後は、おなくなりになる十日前の八月二日で、ご自坊の円海寺でした。病床に臥せておられましたが、庭の見える縁に長椅子を持ち出させ、身をもたせかけながら熱心に教えを説かれました。「君が一緒なので食事が美味しいよ」と、箸を取られながらも、口から出る言葉はつねに教えでした。「先生、お疲れになりませんか」のご返事が「大丈夫、でもネ、たとえこれで死んでも、君と法談をしながらで満足だよ。これが雑談だといけないがね」でした。

これこそこの世で尊いいのちを与えられた者が、いそしみはげんでいる姿です。自分自身の使命を全うする姿の中に、尊いいのちが生きて表れ、そのいのちはいつまでも生き続けていくのです。

谷崎潤一郎の書の偽物語

近藤良貞

(高岳製作所編輯相談役)



文豪谷崎潤一郎が亡くなってから二十年になる。その二十年を記念して、『谷崎潤一郎

「墨の世界」展』という遺墨展が、今年の二月、銀座の鳩居堂画廊で開催された。混雑が緩和した頃合いを見計らって、家内と連れだって見に行った。

谷崎の壮年期から最晩年に至るまでの書幅、色紙、短冊、原稿、書簡等から始まって、愛用していた文具類に至るまでの四十数

点の逸品が、会場一杯に陳列されていて、谷崎ファンを楽しませてくれた。

一とわたりずっと見て廻ったあと、もう一度丹念に見直す積りで、休息所の椅子に腰をおろして一と息入れ、入口で貰ったパンフレットを開いてみた。真っ先に「谷崎の書」と題する松子未亡人の随想録が目についた。

ゆっくりと、一字一句噛みしめるように読んだ。それは谷崎の書体の選り変りについて

述べられたものであるが、最後の締めくくの一節にきて、オヤッと、胸にひっかかるものを覚えた。そこにはこう書かれていた。

戦後、熱海に住んでゐた或る日、東京から美術商の人が来て、知人に依頼されたと云ふ、お軸を二箱持参、箱書を頼まれた。

それを開いて見るや、「是は私の字と違ひます。」と少し厳しい声音で云った。なる程、私が見てもどこか力の這入り方が谷崎とは違つてゐる。よく似せたものと感心してゐたら、「僕が書き直しませう」と云つたかと思ふと、持参の軸を引き裂こうとして力一杯力んではみたものゝ破れやうともしない軸の面を持てあましてゐたのを覚えてゐる。それから半月も経たぬうちに自分の字をかいて送つてゐた。

私がこれを読んでオヤッと思つたのは、ある特別の事情があるからである。

忘れもしない。昭和三十年六月、東京電力で大きな労働争議があつた。当時私は労務担当であつたが、数日にわたり組合と激しい交渉を重ねた末、双方ともくたくたになつての徹夜の談判で、やっと妥結に漕ぎつけた。あのことは部下に任せることにして、何はさておき早く家に帰つて横になるべしと、会社を引き揚げた。

国電阿佐谷駅で下車すると、私の足は、近くのYという古本屋に向つていた。この古本屋は私が阿佐谷に住むようになった時からの古いなじみで、こんな時の私にはオアシスみたいな所である。主人公は私と略々同年輩の口数の少ない篤実な人である。戦後間もなく、何れも私家版非売品の、谷崎の「細雪上巻」や、藤村の「東方の門」を掘り出したのはこの店である。

例によつて入口の棚から見廻つて、奥の番台まで行つた所で、主人公が坐っている後ろの壁に、一幅の書が掛かっているのが目に

ついた。誰の書であらうかとよく見ると、それは谷崎のもので、

奈良坂や南大門のきざしに

ねむりて春の日をくらさばや

という和歌が、お家流風の優雅な文字で書かれていた。

私は大の谷崎ファンである。いささかのためらいもなくこれを買うことに決めた。そこで主人公に値段を聞き、念のために、箱書はあるのだろうか駄目を押してみると、返事が気に入らぬ。

「いえ、箱はないのです」

これでは話にも何にもならぬ。

「じゃあ本物かどうか解らないな。買うのは止めにしよう」

「いや、本物であることは間違いありません。もし、御疑念があるのなら、はっきりした鑑定をして貰ってきますから、一週間ほど

待って下さい」

「そうか、それならともかく鑑定をして貰ってみてくれ。一週間したらまた来るよ」

そして約束通り一週間目に訪ねて行った。

主人公は鑑定して貰った人の名前は言わなかったが、本物に間違いのないそうです、と断言した。

ここまでくれば相手を信用する外はない。

だいいち欲しいのだ。言い値で買った。

しばらくのあいだ床の間に掛けて楽しんでしたが、こうなるとどうにも箱書が欲しくたまらぬ。

幸いその頃私は中央公論社の嶋中鵬二社長と親しくしていたので、同氏に頼んで、谷崎に箱書をして貰おうと思いついた。

その掛軸に釣合う桐箱を買ってきてそれに納め、丸ビルにある中央公論社に嶋中社長を訪ねて、ことの次第を話し、箱書の斡旋方を頼むと、嶋中氏は気軽に引受けてくれた。

ところがである。一と月経っても、二カ月

過ぎても、何の音沙汰もない。内心いささか焦りを感じながらも、このようなことは催促するわけにはいかぬ。まあ気長に待つことにするかと、半ば諦めかけていた頃、突然嶋中氏が訪ねて来た。

「だいぶ前にご依頼を受けた谷崎先生の箱書のことですが、先日先生からご連絡をいただきましたので、熱海のお宅へ伺いましたところ、先生は、＼あの書は氣に入らぬので、破って棄てました。しかしそのままでは先様に済まないから、新しく一枚書いて差し上げることになりました。表装して差し上げればよいのだが、そこまでは手が廻り兼ねるので、表装は近藤さんの方でして貰って下さい」と仰っしゃって、これを下さいました」

嶋中氏はそう言いながら、持って来た風呂敷包みから、さきに私が彼に託した桐箱と、折りたたんだ一枚の紙とを取り出した。

箱を見ると、蓋の表に『和歌 茅渚の海の』と墨書されていた。蓋を取ってその裏側

を見ると、『潤一郎』と書いて、『雪後庵』という印が押されていた。そして箱の中には、私が持ち込んだ掛軸が巻いて納められている。アレと思って、紐を解いて広げてみて驚いた。真中の文字の部分が奇麗に切り取られて、すっぽりと穴の開いた見るも無惨な表装地の残骸である。私は呆氣にとられてしばし言葉も出なかった。

次に折りたたまれていた紙を開いてみて、また思わず唸った。半切の画仙紙に、あの力強い谷崎の字で、

茅渚の海の鯛を思はず伊豆の海に

とれたる鰹めしませ吾妹

という和歌が書かれていた。墨痕淋漓というのはこういうのを言うのであらう、実に美事なものである。うーんと唸りながら見入っていると、嶋中氏が、「あなたのお蔭で私も一枚いただきました」と言って、もう一枚の半

切を開いて見せた。それには次の和歌が書かれていた。

ほととぎす潺湲亭に來鳴くなり

源氏の十卷成らんとする頃

いただいた書は早速表装させて、箱書して貰った箱に納め、熱海鳴沢の谷崎邸に持って行って、谷崎に見て貰い、厚く御厚意を謝したことがある。

五十二年四月に刊行された『谷崎潤一郎家集』に当たってみると、「奈良坂や」は昭和初期、「茅渚の海の」は昭和三十年七月、「ほととぎす」は昭和二十九年六月の作とある。してみると、「奈良坂や」と「茅渚の海の」してみると、「奈良坂や」と「茅渚の海の」との間には数十年の隔りがあることになる。もしも私が入手した「奈良坂や」の書が、その歌の出来た頃に書かれたものであるとするならば、「谷崎の書」の中の、谷崎の書体の変化に関する松子未亡人の記述と照し合せて

みても、後年の谷崎の筆跡と大分違っていることは、決して不思議なことではない。

しかしそれにしても、「谷崎の書」に書かれていることと私の経験とが、余りにも酷似しているので、とてもひとこととは思えないのである。

偽筆ものとは知らないで、谷崎に箱書を頼み込んだケースが、他にもあったというのなら別だが、そのようなことは滅多にあるものではない。極めて稀有のことと観るのが常識である。私の心にひっかかるものを覚えるのは仕方ないことだろう。そこでその謎解きをしてみたくなって、独りであれこれと思いめぐらせた結果、次のような推理を下した。

「谷崎の書」に書かれている偽筆掛軸破棄事件は、実は私のことに違いない。私が箱書を頼んだ「奈良坂や」の軸は偽物だったのだ。でなければ、あの謹厳な谷崎が、他人の物を無断で切り取って棄てるという、常軌を逸した激しい行動をとる筈がない。

谷崎は嶋中氏の本当のことを言うのを憚かって、「あの書は気に入らぬ」という表現を使ったのかも知れぬ。或いは嶋中氏には率直に事実を告げたのであるが、嶋中氏は私に遠慮して、谷崎の言葉としてあのようにカムフラージュしたのか。そこところはなんとも判定しかねるが、何れにしても、私が持ち込んだ書は偽物だったのだとみて間違いないようである。いまそう反省して冷汗三斗の思いである。

松子未亡人はこの間のなりゆきをまのあたりつぶさに見たに違いない。然しそれを「谷崎の書」に書かれるに当っては、私や嶋中氏に恥をかかせまいとの細やかなお心づかいから、「……東京から美術商の人が来て、知人に依頼されたと云ふ、お軸を二箱……」という表現を使われたのであるまいか。

私にはどうもそう思えて仕方がない。

|| 新刊 ||

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B6判函入 二七五頁

定価 三五〇〇円(二二五〇円)

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

△発売△

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

振替 東京〇―一九〇〇

健康の涼風

一、長寿の悩み

日本は世界一の長寿国だと新聞が報じていた。

男は七十四歳、女は八十歳、平均七十六歳という。

古代の平均寿命は十五乃至十六歳

江戸時代が三十五歳

大正時代は四十三歳



おおむろりようこう
大室了皓

(大本山増上寺執事)

であるから、近々七十年ほどのうちに、三十年以上も寿命が伸びたことになる。

いまは、女性の寿命は年々のびているが、男性のそれは伸びなやんでいそうだ。理由の一つは、男の子は育ちににくいので、最初の子は女、二番目が男の一姫二太郎が望ましいと昔からいわれているとおり、幼年までは男の子の死亡率が高いことがあげられるだろうが、ここに来てショックなことは、熟年

男性の自殺が急増してきた。このこともまた男性の平均寿命の伸び悩みの原因の一つにあげられるという。

私は毎年のように発表される平均寿命を知って、いつも不審に思うことがある。

女は業が深い、と昔からいわれてきているのに、どうして長生きができるのだろうか。

長寿は万人の求めて止まないものであった。長寿すなわち幸せ、という方程式であった。

その業つくばりが、幸せになっていることはどうしても納得できなかったのである。

だが、女性八十歳と知って、納得できそうになった。

老人病棟を訪れると、収容者は老婆の方が多い。これらのほとんどは、再び社会復帰することは困難である。日に日に衰えて、辛うじて生きてはいるが、死を待つ人々といっても過言ではない。

しかもボケ老人が多い。家族の識別ができない人も少くない。

生きるたのしみもなく（おそらく本人たちはそうだろうと思うが）、ただ食べて寝て、死の使いのやってくるのを待っているようだ。

昔は八十歳でさえ生きられる人は少なかった。いまは平均八十歳であるから、八十歳以上の人々が、大正時代には予想もつかなかったほど、数多く生存していることになる。

最近とみに、老人問題がとりあげられるようになったが、ボケ老人も含めて、不幸な老人、若い人の生活を脅かす老人たちが多くなってきたからだ。

もし、幸せ老人ばかりだったら、こういう問題など起きる筈はない。

とすると、かつての、長寿イコール幸福という方程式はもはや絶対の公式ではなくなったことを意味する。

逆に、長寿イコール不幸という方程式が近い将来には公式化されるかもしれない。

人間はあまり長生きすると、死にたくなるのだそうだ。

長寿が苦の種になる。そういう皮肉な時代になりつつあるのだ。

やはり業の深い人は、幸せにはなれないのだ。

と考えてきたら、長年の不審が解けたような気になった。これは半分は冗談ではあるが、半分は本気である。

だいたい、業の深い方のものが、幸せになれるなどといったら、子供の教育は成り立たないではないか。

知人に九十八歳の老婆がいる。寝床に身を横たえているが、幸い長男と嫁（といっても七十歳にもなるが）だけは判別がつくようだ。

病室を訪れると、きまって繰り返えすという。

「どうして、お迎えが来ないのだろう。早く来てもらいたいのに」

と。通常の病氣見舞いなら、

「陽気もよくなればきつと元気になって、家へ帰れるわよ」

と励ますこともできようが、この繰り返しには返えず言葉がない。

家族たちも、同じ思いであるし、並みの励ましの言葉はこの老母には通じないことを知っているからだ。

彼女は長寿を嘆きつつ、日々を送っているのだ。

これからは、長寿を単純に喜ぶ人は次第に少くなつてゆくに違いない。

どうしたら、幸せに人生を終えることができるかということ、若い時から真剣に考えねばならない時が来ている。

そういう意味では、生の哲学オンリーの時代は過去のものとなり、死の哲学の時代を迎えたといつても過言ではなからう。

本当の闇を知っているものにして、はじめて光の世界が解るものだ。

今を、これからの幸せに生きるために、終

えるためにこそ、死の哲学（死の宗教）が一層説かれねばならないし、それに耳を傾けることが益々大切になってきている。

それに応えるものとは。いうまでもなく、「浄土」の教えに他ならない。

先般、善光寺の大宮智栄上人が遷化された。九十九歳だった。

なくなる幾日前に、見舞いの客を案じて、もてなしの用意ができているか、失礼のないように、などという心配りを側近に語っておられたという。

生涯を念仏に捧げられたお方の、立派なご最期を身近かに知って、あらためて、さきのことを考えさせられたのである。

二、盆提灯

いま、増上寺の大本堂内には、小さい小さい盆提灯が、いくつも吊り下がっている。

七月のはじめに、かわいい幼稚園児が集まって、たままつり法要が行われた。その時に

この子たちが奉納したものだ。

四・五歳の子供たちの作品だ。上手にできたものもあれば、曲っているものもあるが、それは問題ではない。

私は一つ一つ眺めていて、ほのぼのとしてきた。

いま教育界は悩んでいる。校内暴力は中学生かと思っていたら、小学校にまでさがってきている。

先日、増上寺で賽銭ドロボーがつかまった。中学一年生の坊やだった。

聞けば、父親は酒ビタリ。母親は夜の女。帰宅しても誰もいない。おなかが空いてもお金がない。そこで、ということだった。

私はこの子を憎むどころか哀れになった。そして両親が憎らしくなってきた。

子供が悪いのではない。大人が悪いんだ。これからの世の中を背負う大切な子供を立派に育てるために、大人たちには大きな責任がある。

「ボクたちワタシたちが、立派に育つことができますように、お兄さんお姉さん、おじさん、おばさん、みんなみんな、どうぞ仏ごろを持って下さい。仏ごろの灯をあなたがたの心の中にもして下さい。」

そして、明るく、正しく、仲よくくらすことのできる世の中にして下さい。お願いします」

小さな提灯の一つ一つが、大人の私たちにそう語りかけているように思えてならなかった。

反論する人があるだろう。

子供たちは、なにもそんなことを考えて作ったのではない。保育指導のカリキュラムの中に盆提灯作成という一項が組み込まれているので、この時期になると、保母さんは園児たちに、

「さあ、今日はこれを作りましょう」

「どうして」

「たまたまつりが、あした増上寺であるのよ。」

みんなで、お詣りするの。その時に仏さまの前に吊るすためよ。上手に作ってね」

彼らは保母さんの指示に従って、なんの考えもなく作ったものだ、と。

そのとおりだろう。

しかし、そういう眼で見たとしたら……色紙がきれいだ。これはよくできている。

これは不器用な子の作品だな……。それぐらの感想しか持つことはできないだろう。

三界唯心造という。

幸せに日々を送ろうと願うならば、「心に灯を」という眼で見ることができなければなるまい。そういう眼を持てる人であってこそ、幸せを把むことができるのではあるまいか。

あとのようにしか考えられない人、そこまですで考えがとまってしまう人には、ほんとうの幸せはやってこない。こういう人は、自分の不幸の原因を他に転嫁して、愚痴に明けくられる人生しか送れないのではなからうか。

涼しいそよ風が吹く。いつ時、暑さを忘れさせる。

しかし、この涼風は自然現象の一つにすぎない。しかし考えられなかったならば、又そうとしか考えられない人ばかりだったら、この世は乾いた砂漠になってしまう。

増上寺の山門の掲示板に「今月のことば」として掲げておいた。

そよ風さん ありがとう

どこからきたの

「おそらの向うから」

どこなの

「ののさまのお国からよ」

盆提灯がそよ風にゆれる。この風は、なつかしい亡き人の国、お浄土から吹いてきたものだ、と思うことができたなら、どんなにか嬉しく楽しく、そして健やかな生活となることだろう。

村上鉄瑞師著

第五判 二八九頁
定価 二、〇〇〇円

〒 三〇〇〇円

法然上人徒然草

所謂作家・学者の著作とは一味も二味も違ったわが法然上人像。一人の青年僧の限らない上人思慕の情念が生んだ労作。特に若き浄土教徒の必読をおすすめします。

自費出版のおすすめ

随筆・句集・歌集

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理されて、あなたご自身の本を作ってみませんか。小社ではなるべく小経費であなたの本が出来ますよう、ご協力させて頂きます。

東京都千代田区神田須田町二一三十一
有限会社 ルンビニ社

電話〇三一(二五三)

三五二〇
三五二九

浄土句集

一田牛畝選

評 履物に杖を通して御忌の会座に合掌し

ているわけである。履物が間違わぬよう杖を通して置けば、安心して聴聞も出来るというものである。

東京 真野 竜

緑映え雅楽に聞く華燭典

東京 猪瀬 幸子

老鴛の声こぼれ来る岬かな

京都 水谷 激道

新緑の樟の大地に句碑生れし

福岡 原 敬二郎

春寒やちんだやうに見ゆる丘

福岡 安藤平次郎

しろじろと燈に浮く天主春の雨

熊本 山崎 石庭

さからわず風に吹かれて夏柳

評 梅雨ともなれば何か熱いものを所望される。梅雨の吉野に遊ばれたらしい。そこでまた葛湯をもてなされ、嚙ぞかし旅情を暖められたことならん。梅雨の吉野も格別だ。

冷奴臍に薬味の紫蘇生姜

福岡 園田 展右

長梅雨に砂壇いささか乱れあり

京都 岩井 伏水

評 これは京の法然院の砂壇を読まれたものらしい。立派に作られた砂壇も乱れている。長梅雨のためならん。

吉野葛もてなされ居り走り梅雨

東京 田中 秀代

履物に杖を通して御忌の寺

福岡 上滝津弥音

熊本 山崎 松子

河豚獲る灯鳥賊掬ふ灯と夜毎燃え

三重 山田 歌甫
良き友のありてくつろぐ巖山

東京 満尾衣有子
風にそふこて、まりの花優しけれ

福岡 荒牧 還愚

白牡丹はのか紅ひき高貴なる

福岡 服部 光代
激戦の跡に静かや若葉風

東京 野本 知子
鎌倉やどの道行くも梅匂ふ

群馬 島津 か寿

詩の旅夏鶯に付ち止まる

山口 三井 寛静
緋牡丹の炎えて寺領を賑やわせ

福岡 前田 秀峰
探梅の小富士遙かに酒を酌む

山形 松田 光著

寺の庭かすめて飛燕十字切る

山口 上野 明達
大塔に五体投地の裸人

福岡 永江 隆説
夏瘦せて皺多くなりと文にあり

山形 松田 允子

深庇鳥語しきりやつぼくらめ

東京 真野よし子
紺紺着て母の忌と多佳子の忌

大分 丹羽 難中
骨折の和尚の懺悔の梅雨の入り

東京 細田 初枝

春陰や無住寺の門傾ける

東京 小笠原香祥
湯豆腐に舌鼓打つ嵐山

福岡 権藤みきを
かいしやくの響く青葉の祖廟まで

長野 友瀧旋風子

新茶くむ節くれ立てる老農夫

東京 栗原やえ子
逝く春や小町の墓のうら悲し

福岡 山崎 鬼川
袋掛橋湾の波まふし

千葉 須田 牧草

春眠の両掌を膝に置きしまま

東京 吉原登起子
窓に寄り茄子の花見る朝かな

一田 牛畝
参道に金魚掬ひや開山忌

心のはなし(下)

「因果」ということば

曾^そ
田^だ
文^{ふみ}
雄^お

○

「因果」ということばがある。これは『観無量寿経』に、
深信因果、不謗大乘

と出ていることから知られる通り、仏教用語に発したもので、わが国へも仏教と共に伝わって来た語と考えてよからう。

ところで、この「因果」は、わが国では、時代が経つにつれ、新しい意味が生じたりしている。その様相について記してみたい。

全部が全部というわけではないが、ことばによっては、同じ一つの語でありながら、時代により、地域により、人によっては種々意味が変えられたりするものがある。例えば「あたらし(い)」という語でいうならば、奈良時代の昔「惜しい」を意味していたものが、時代と共に「新しい」なる意味に転じていく。また「貴様きさま」ということば、最初は敬意のこもった用法であったのが、凡そ幕末の頃からののしりを意味するように変化する。あるいは「ぬくい」が地方によっては、そのまま「暑い」をも意味することがあったりする。文献を扱う際には特に、何時、何処で用いられた例か、という点が解釈上大切な要素となる所以である。

われわれが日常使うことばの殆んどは日本語であって、中に外来語が交っている。その場合、大多数の者は日本で生れ、日本語を使いながら育ってきたという理由から、そこに出てくる単語が日本語であるか否か、容易に区別できる、とたかをくくってかかる。しかし、果して日本語か否かの弁別は、そんなに易しいものであろうか。

中年以上の人は記憶されていよう、かつてマツダランプと呼ばれた電球があった。後に東芝ランプと変わったあれである。この「マツダ」について、大抵の人は日本語そのものと解していたように思う。特に後出のものながら、自動車メーカーの一つに「マツダ」というのがあったりするものだから、ごく自然に、電球の方も「松田」あたりの漢字を想起し、創始者が製造会社の名称から採られた商標名ぐらゐに解するのがむしろ当然かも知れない。しかし、そう信じ込んでいる人に、その語が火の神を指すアラビア語だと告げるなら、いささかならず驚きはしないだろうか。

逆な例としては「ブリジストン」がまず思い浮かぶ。だがこの名、余りにも知れ亘っている為、「ブリッジ」が橋、ストンが石で、タイヤ会社を創った久留米出身の石橋なる人の姓に基づくということ位、改めて記すまでもなからう。けれども、それが「サントリー」となれば、迷う人も出るのではなからうか。物がウィスキーなることからしても、外国語と受取る方が素直な考えといえよう。ところがこれも亦、ブリジストン式の命名に同じで、「鳥井さん」に由来した、日本語をもじった名称である。

商標名ばかりとは限らない。一般用語で、「ゼンマイ」は日本語に非ず、と心得ている人もいようが、これとて

「セニマキ」が変ったもので、やはり日本語に違いないし、星の「スバル」さえ『枕草子』に出てくる程で、れっきとした日本語なのである。

いわんや漢字の熟語にあつては、中国渡来の単語とばかり信じ込んでいるものの中に、存外日本製のものがあつたりする。これが「倶楽部」あたりだと、元々からの漢語としては少々首をひねりたくもなるうが、「看護」の場合、まず中国渡来の語であることを疑おうとする人はあるまい。が、この語、中国の文献には一切見当らず、どうやら室町末期から江戸初期にかけて日本で作られた単語のようである。

といつても、やみくもにことばの発生当時にまで遡るだけが能ではない。時としては、時代錯誤を犯して、とんだ失礼をしてしまう場合があつたりする。「笑止」という語。このことばは、笑いが止まる、と表記されることから推測できるように、笑うこととは丸で正反対の場に際しての用法が元の意味するところであつて、「氣の毒」という訳が当る。他に『西教寺本平家物語』には、

此事天下にをいてことなる笑止せんなれば、公卿きやう僉けん議あり。

これだと「大変なこと」という意味で使われている。

しかし、だからといって、元の意味や『平家物語』での用法にしたがつて、人が死んだ折、弔文などの中で「笑止千万」と書いたり口にしたるものは、も早今日では許されることではなくなっている。仮名草子の一つ『可笑記』に用いられた、

おのれが心には随分善事なりと思へども、よそめ笑止せんなる事あり。

における「ばかばかしくて、笑うべき」なる意味が今日の所普通用法として通っているからである。

さて、以上思いつくままに種々な例を示しながら説明を加えたものだから、混乱されたかも知れないが、「因果」

の方に話を戻したい。

「因果」なる語を辞典に求めると、『諸橋大漢和辞典』では、

① 〔仏〕因縁と果報。

② 悪いまわり合せ。

③ 以前に行った業の報い。

④ 哲学用語。原因と結果。

のように四項に分れる。次に『日本語大辞典』を開いてみると、

① 仏語。原因と結果。

② 前に行なった業の報い。

③ 不幸。不運。

④ 哲学で、世の中の事物一切に存在する原因・結果の必然的關係。

と同様四項に分ける。双方をつき合わせるに、夫々が別個な編者に抛ったもの故、そっくりでない事は当然として、②と③との順位を考えない限り、凡そは同じ、と見做してよい。

その場合、④の哲学用語とされた項目は、古典文学作品の用例とは種類を異にしたものである為、これは除外して話を進める。

『日本国語大辞典』には、各項毎に幾つかの用例が載る（『大漢和辞典』の方にも用例は勿論出ている）が、それらを並べてみるならば、そこに一つの時代的な流れのあることが窺い得る。

即ち、夫々に掲げられた古典の作品名を示すなら、次の通りである。

① 日本霊異記・今昔物語・栄花物語・平家物語・大智度論

② 太平記・御伽草子・虎明本狂言

③ 狂言記・浮世草子・古今集遠鏡

なる具合。これらの中、『大智度論』は日本の古典でない故除外する。

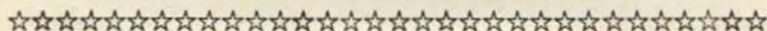
すると、大体において、①中の作品よりは②の方が新しく、②よりは③に含まれる作品の方が新しいことに気付かう。

②の最後に『狂言』があり、③の最初にも『狂言』例が載っている。しかし、これら二つは、写本こそ違え、いずれも同一の『抜殻』という狂言中から拾われたものである。

そうなると、「因果」なることばの意味は、①の場合が最も古く、次いで②・③という順序にしたがって時代を新しくしていることになる。因みにいう。右に述べたように、同一作品中から②と③のように別項目の用例が拾えることで知られる通り、②の用いられている時期に①なる用い方は当然であったことであらうし、③の時期に入っても、①・②なる使い方は並行して存していたことであらう。

斯様に、辞典に載る用例だけを通して推定したのであったが、その推定、多分誤りないと思う。というのは、『日本国語大辞典』の編集方針は、できる限り古い用例を示すべく努めているのであって、②なる意味を有する作品は、恐らく『太平記』が最古だろうし、③も『狂言』を遡る例は、より古いものからは拾えまい、考えられるからである。

子供の頃、秋祭りで、見世物の呼び込みが「親の因果が子に報い」とどなっていたのを思い出すが、この用法は『今昔物語』や『平家物語』が作られた時期には、未だ文学作品に採られることなく、鳥取県民謡「何の因果で貝がら漕ぎ習らうた」における「因果」の意味は、『太平記』作者などがその作品中に用いようとはしなかった類だったのである。



立ち止まるな善導

〈2〉

寺内大吉

挿絵・松 濤 達 文

前章・絶唱の經典 (二)

四

少年サビヤは一日の大半をタバス尊者の
“隠れ石窟”で過さねばならなくなった。尊
者が殆んど大崖仏塔へは足を向けようとはせ
ず、こちらの石窟に籠もりきったからであ

る。明け暮れ、大無量寿経を少年の脳壁へ刻
印することに専念した。

学習は經文の暗記だけではなかった。盛り
こまれた教義内容の分析や次々に登場してく
る諸仏菩薩について該博な知識をくりひろ
げ、タバス尊者は倦むことを知らない。



「仏塔の方で所用もございますので、今日は……」

中座しようとする、鋭い語氣でさえぎられた。

「あんな処へゆく必要はあるまい」

「しかし尊者さま。これでも私はアーチャリヤ（阿闍梨）に仕える身でございます。ことに今宵は受戒会がおこなわれます。波羅提木叉の戒本を、私が読みあげなければなりませんね」

大崖仏塔内では定期的に善男善女の在家衆を選び出して大乘戒を授けている。今宵がそれにあたっていた。

後世になって僧位として定着した「阿闍梨」位が、すでに初期の大乘教団で実在していたようだ。少年サビヤが現在随侍する阿闍梨マトナは、タバス尊者が去ったあと大崖仏塔における筆頭長老であった。

「そんなこと、気にするな。やりたい者だけでやらせておけばよい。サビヤよ。あのマト

ナ長老どもに何年師事しようとも、そなたは仏法の果実に触れることはかなわぬぞ」

「……」

だからこうして、しの中で尊者のもとへ学びに来ていたではありませんか、とサビヤはぶつつけたいところだ。

「それと、大乘戒のう。果たして真の菩薩戒とは何であるか、あの長老連中はご存知なのか。部派教団（小乗）の形式ばかりを真似ようとする。よろしいか、サビヤよ。部派教団の戒律というものはな。僧伽内における掟だ。僧伽から受けるものだ。当然、その長老が僧伽内で共同生活を営むための戒や律を授ける。しかし大乘菩薩戒は仏（ほとけ）からじかに与えられるのだ。小うるさい日常生活の立居振舞を規制するのが目的ではない。他人を救い自らも救われんとする信心の力を、仏から授かるのだ。そこに長老や上座者が介在する余地はない。彼らが受戒会に立ち会うのは仏の声や心を伝える手助けと、自身も身

心を一新してその戒に目ざめ直すことを目的とする。それがどうか。阿闍梨マトナたちは自分が仏にでもなったつもりでいるであろうが。そうは見えないか」

少年に強く同意を求めてくる。サビヤとしても軽々しく同調は出来なかった。それほともかくタバス尊者が少年を制止したのは大無量寿経の学習中断を惜しむ気持もあったであろうが、同時にわずか三年間で変節しつつある大崖仏塔へのきびしい批判が底流となって奔騰していたようである。

ひとときの昂奮がさめて、しかしタバス尊者はじきに柔和な笑顔を取り戻した。

「いやはやこんなわめき散らしをしておると、わし自身も大乘者からはほど遠くなくなってしまふ。往け、サビヤよ。やはりおぬしは仏塔の住人だ。あそこの仕事は忠実にやってのけねばならない。さもないとこのわしの飯も運んでもらえなくなる」

ようやく「隠れ石窟」から解放された少年

サビヤは仏塔へ登る崖道を急いだ。

たしかに三年間に及んだ放浪の旅がタバス尊者を心底から揺さぶり尽くしたようである。いま大崖仏塔の長老たちを「変節」となじっているが、阿闍梨マトナ師たちは格別に以前と変ったわけではないのである。在家信者への受戒会にしてもタバス尊者の手で定期的に施行されてきた。自分は大乗菩薩戒を授けたつもりだろうが、阿闍梨マトナの内面まで深く探究し得ないはずだった。

いささか焦慮にも似たタバス尊者の大乗思想の確立。そこに現在取り組んでいる大無量寿経が深くかわつていそうな事実を少年サビヤは疑わなかった。尊者の学習ぶりは異常とさえ思われた。教説の一隅を占める經典としてではなく、大無量寿経が仏説のすべてをおおい尽しているのだ、と尊者は強調する。

ある日の学習でこんな言いかたをした。

——人間は必ず死ぬ。いつか必ず死ぬ。事故や不運な出来事に遇わずとも百年も生きた

ら必ず死ぬ。サビヤよ。おそらくこの地上で、この事実を最初に認識し、それを基軸とした人生を考えた人こそ釈尊なのだ。

——誰もが必ず死ぬ。それが何を意味するか。サビヤよ、理解できるか。それは人間の死が平等だということだ。権力を握る王者も、富豪も、病弱な者も、貧者も、そして善人も悪人も同じように死んでゆく。死に差別はない。

——サビヤよ、死に差別がなければ、生きる基軸も平等でなければならない。釈尊の空の思想、平等観はここに発端している。大無量寿経において、修行者ダルマカーラ（法蔵菩薩）は、この「平等の死」を誓った。救いに差別がないことを願った。差別が残るようでは自分も救われない、と誓っている。これは生者の無差別を宣言したことにもなる。判るか、サビヤよ。

——仏弟子によっては、とりわけ修行のきびしさを誇る部派教団の沙門比丘中には、こ

の無差別を否定しようとする。ダルマカーラが西方浄土で阿弥陀仏となっている事実、この浄土の教えを仏法と無縁だとさえ誹謗する。西方の国、異教徒の神を崇める信仰だとあげつらう者さえいる。釈尊が説かれた仏法の基軸が人間生死の平等性から発端しているとすれば、この阿弥陀仏への信仰こそ釈尊と衆生とを強く結び付ける教えではないか。

——サビヤよ、釈尊は八十年の御生涯を通じて人間世界の問題以外は一切お説きになられなかった。神もなければ鬼もなかった。もちろんそれらは実在するであろうが、その神の光りを全面で吸収し、鬼の黒い影を力強い足で踏みしめる。これが釈尊の説いた仏法だ。

——サビヤよ、わたし自身も気づかなかった。靈鷲山で古老からこの大無量寿経を伝法されたときですら、なお気づかなかった。この経典、ここに盛られた思想、信心の重要性に気づかなかったのだ。それがおぬしに教え

はじめているうちに、みずから省察を深めながら經典の内容を分析しているうちに、蒙をひらかされた。これこそ真の仏典ではなかったか。釈尊の教説、原点はじつにここに発しているのではなかったか。

——これが大乘仏教というものだ。サビヤよ、わかるか。大乘仏教とはおのれ独りだけが知り尽くして誇るものではない。衆生と共に学び、他に教えているうちに真意をおのれが体得してくるものだ。他人を救うべく身を投げ出したとき、おのれ自身も救われる。それが大乘の教えなのだ。

タパス尊者がかたる一語一句に火焰が噴き出すような気迫がこもっていた。その都度大きくうなずく少年サビヤだったが、今こうして大崖仏塔への道を急いでいると、むげに教団の在りかたを否定し去ることも出来にくかった。阿闍梨マトナ師を軸とした「城内工作」に深くかかわっていたのでもある。

五

在家信者九人の受戒会が終ると、阿闍梨マトナは少年を自室へ招いた。自室と言っても釈尊の成道像を象徴する菩提樹の線画がある正面岩壁の底をくりぬいた隧道添いに並ぶ洞窟群の一つにすぎない。

阿闍梨は五十がらみの男盛りだった。濃い眉毛、目鼻立ちの彫りも深くインドの典型的なナーガラカの面貌をしている。

ナーガラカ。都会士という訳語をあてたりする。大都市で育った文化種族である。阿闍梨マトナが若い時代を過したと言われるウッジャイニーの町などは、その都市文化が最も華やかに咲き匂った土地であった。美々しい城壁で囲こまれ民家はどこも優雅に造られていた。物資の集散は豊かで人々の生活レベルは高かった。町の主権者はしばしば交替したが、人々はまるで無関心だった。その日その日の生活を享受した。世界に名高い性書「カ

「マ・ストラ」も、この時代、この町のサ
ロンで書かれたと伝えられる。

まことにこの三、四世紀の春秋、ウッジャ
イニーに君臨する権力者の肌色は目まぐるし
く変動した。アショカ王（阿育王）で統一され
たインド人による政權は、そのあとシュンガ
王朝の失政で根底が怪しくなった。しばしば
西北から夷狄におびやかされた。大月氏と呼
ばれる遊牧民族だった。だが直接インドの中
枢へなだれこんで征服者となったのはギリシ
ヤ人の軍勢である。バクトリア王を称した。
その王の一人メナンドロスはミリンダ王とも
呼ばれ熱心な崇仏帝となった。

大月氏に隸属していた小アジアの土侯カニ
シカ王も仏教を重んじた一代の英雄である。
阿育王、ミリンダ、カニシカとつながる仏教
外護者の系譜、彼らをつないだインド及び西
域の権力者たちは殆んどが仏教の断圧者とな
った。これは仏教の教義に疑惑をいだくとい
うよりも偉大な崇仏帝たちのイメージ消去が

ねらいだったようである。

阿闍梨マトナが花の都を捨てて小アジアへ
流亡してきたのも、カニシカ王滅後、インド国
内で起ったバラモン教の復調、仏教追放の嵐
が原因となっているにちがいない。そして、
流れ着いたこの小アジアもまた、ないしはそ
の一族が信奉してきた大乘仏教が根づくには
さまざまな障害をともなう天地であった。

阿闍梨マトナの私窟へ通ると、そこに先客
がいた。白髪のお婆だった。

その白髪に見おぼえがある。たったいま大
乗戒を受けた九人の在家信徒の一人だったか
らである。

「この人はな、朱駒波の城内から遙々来られ
たお方だ」

「朱駒波の城内から……」

サビヤはいぶかしげに老婆を見つめた。

大乘戒を受けるためにはある期間をこの大
崖仏塔内で修行をつまねばならない。信仰の
「証」を得て、長老たちの推挙によって受戒

に至る、といふのがしきたりだった。この老婆、ふだん仏塔内では見かけない顔なのである。

朱駒波の城内からやってきたという。たしかにその「鴉の町」にも断崖者の眼をいかくぐって大乘教徒の拠点があった。そこで、ひそかに修法が続けられていた。しかもその拠点の内容は、少年サビヤが隅々まで知り尽くしているのだった。この少年だけが本拠の大崖仏塔とをつなぐひとすじの連絡路だったからである。

「カナウジ―刀自とおっしゃる」

「……」

「今夜これからお戻りになる」

「これから朱駒波の町ですか」

「サビヤよ。婦人の夜道は危い。お送りしてくれぬか」

「それはもう……」

容易いことではあったが、何か裏の使命があるのではないか。サビヤはそれが知れた

し。阿闍梨マトナ師を軸として朱駒波城内の教線伸張工作は着々と進行していた。その工作と老婆受戒との間に何か密接なかわり合いがありそうであった。

そこで阿闍梨マトナは突然、インド・アリアの標準語ともいふべきブラクリット語でしゃべりだした。ちなみにこの小アジア一帯の慣用言語はウルドゥー語で、サビヤ自身もこの言葉のなかで育ったのだが、タバス尊者によってブラクリット語を教えこまれていた。

「真偽のほどは定かでないが、朱駒波の城内に、それもだな、訶利多種王二世の後宮に大乘の菩薩衆がまぎれこんでいるというのだ」

「青衣の鬼の後宮に、ですか」

「このカナウジ―刀自はな、訶利多種王二世最愛の王妃ウルヴァシー夫人の乳母だったという。彼ら主従は後宮でひそかにその大乘菩薩から仏法の手ほどきを受けた。今宵ここへやってきたのも、そうした組織が実在するこ

とを伝えるためだった」

「しかし私は『城内工作』で何度か後宮も探ぐったのですが、そんな話は聞いたことがありませんね」

「異かもしれぬ。しかし、異か、正当な血路か、しっかりと見定めておく必要がある」

「わたしがその探索を」

「そうだ。従来ゆきがかかり上、当然の仕事だし、それとサビヤ。近ごろのおぬし、少し怠けておるからな。どこかで油を売って、きっぱりこの仏塔へ寄りつかぬ」

「それは阿闍梨さま……」

「釈明はよろしい。おぬしは未だ子供だ。いずれ遊びたいことが沢山あるのだろう」

「遊んでなんかおりませぬ。新しい經典に……もうわたし、子供ではありませぬ。二十歳になりました」

「何でもよい。いくら遊びほうけてもかまわぬ。ただ、やるべきだけは目一杯仕事をするのだ」

柔和な笑みを口もとへ戻すと、流暢に土語をあやつりにじめた。

「カナウジ一刀自。この少年にお城までお供をさせます。一つだけお願いがございます。どうかこの者を王妃さまへお目通りさせてやって下さい」

老女も穏和な微笑をかえした。

「それはもう、王妃さまの方でも是非おたくの教団と接触致したいとおっしゃっております。城へ戻ったら、すぐにでもとっくり御懇談して頂かなければなりません」

聞いているマトナ師の耳たぶがみるみる赤く染まった。老女は男たちよりは遙かに滑めらかなブラークリット語を駆使していたからである。

「池をまわる道を通ってゆきましよう」

白髪の老女カナウジは大崖仏塔を出ると、北壁の山路をえらんだ。ここから池のほとりまでの下りはけわしいが、その先は騎馬の通行が可能な駅路となっていた。南方の岩

瘤だらけな斜面を降りるよりは楽だった。

北壁の嶮路にはタバス尊者の「隠れ石窟」

があった。少年サビヤは老師のもとへ立ち寄って一夜を明かしてから再出発を、と考えないでもなかったが、老師にカナウジ―刀自を引き合わせるのがためらわれた。老女の正体を未だ確認できていない。もしも「青衣の鬼」が仕かけた異だとしたら、「隠れ石窟」まで知らせる結果になるではないか。

北壁を下りきった。その切り立った岩壁と、さらに北の夜空へ伸びてゆく雪山との間に青みどろの池がひろがる。老女はそのほとり、青苔に染まった石に腰をおろした。

「あとはこのままゆけば夜が明ける前には城内へはいれますよ」

相変らず流麗なインド語だった。

「城門は開けられるのですか」

「それはね。わたしは第一王妃の乳母なんですよ」

宮廷内での権力を誇示してみせる。

「阿闍梨マトナ師の話によると、朱駒波城内に大乘菩薩がいるとか」

「いらっしやいますよ」

「考えられませんか。そんな仏者がいて、なぜ青衣の鬼、いや大乘教徒を逮捕したりするんでしょうか」

「そのお方が表立って発言できればねえ、そんな暴虐も防げるんじゃないか」

「その菩薩は、何処からやってきたのですか」

「何処からって……此処ですよ。この池の底からお出ましになったのです」

「池の底？」

「そうです。以前は池の底に棲んでおられました」

「池の底に棲んでいるのは竜ではありませんか」

「そうです。竜でいらっしやいます」

老女は身じろぎ、また表情にけれんの皺一つまじえないで言い切った。

☆☆

变
身



六

「その竜が、どういう経緯でお城の中へはいりこんだのですか」

池に添って駅路をゆっくりと歩きだしながら少年サビヤは問いかけた。

「お城の警備大臣がこの池の周囲を見まわりにきたのです……」

おそらく警備大臣は大乗教徒が潜伏する大崖の仏塔周辺を偵察にきたのであろう。騎馬だったが、その乗馬が池畔の草むらへさしかると俄かに棒立ち、一步も進まなくなつた。大臣は怪しんでみなに下馬を命じて草むらを調べさせた。やがて大男が寝ころんでいるのを発見した。

「何をしている?」「昼寝だ」「しかし、うちの馬どもが立ち止まって動かなくなつたぞ」「情けない馬ども奴」「お前の正体が怪しいとにらんだにちがいない」「怪しいものか。見てのとおり、わしは沙門だ」

大男は糞掃衣を肩からかけた僧形である。こんな押し問答があつたすえ、

「沙門なら比丘名を何と呼ぶ」

大臣は訊いた。

「竜猛——」

「何っ、竜だと」

下の猛(みょう)を聞き落してしまった。沙門もべつにこだわらなかつた。

竜なら竜の「証かし」を示せ、と大臣は命じた。

立ち上がった沙門は法衣を脱ぎ捨てると、さんぶり池へ飛びこんだ。そのまま姿を現さない。大臣とその家臣は草むらの糞掃衣と池面とを見比べながら空しく時間をすごした。すでに夕陽が傾きはじめ池の周囲は暗くなつた。

「あの坊主、裸で逃げだしたのか」

「衣一枚で命が助ければ儲けものよ」

「うちの王さまは贖せ坊主にはうるさいからな」

岸辺で大臣たちがぶつくさ私語していると池の中央へ大音声が立ちのぼった。

「おうい、いつまでひとをもぐらせておくんだ。池の水はこれでも冷めたいんだぞ」

大男の沙門だった。

水面に浮かんだ首から上はさっきのままだが、わずかに覗く肩や腕は青いウロコがぶ気味な色彩を輝かせていた。

「やっぱり竜だ」

大臣は舌を巻いた。ふと功名心もきざした。竜の沙門が説く仏法——いかにホトケ嫌いの訶利多種王二世でも耳を傾けるかもしれない。朱駒波の城内へ連れてゆくことにしたというのである。

少年サビヤは笑みを噛みながら老女の話に耳を傾けた。

竜猛とか名乗る案外まやかし沙門かもしれない。池の水ぎわで寝ころんでいて、ころあいをねらって池面の中央へもぐって泳ぎ出ることだって可能ではないか。警備大臣たちは

まんまとこの子供だましに引っかったとも推理できる。

「その竜がですね、大乘菩薩とはどういうことですか」

「さあ、わたしにはよくわからないんですが、沙門がお説きになる仏法は、宮廷にいる比丘衆とだいぶ異なっているのです。いちばん熱心に聴聞されるのが王妃さまなんです。きっと沙門から言われたと思います。皆さまた方仏塔と連絡を取るようにと」

それが「青衣の鬼」の指し金でなければ、少年サビヤたちが推進している城内工作びつたりの潜入ぶりではないか。

ところで竜猛と言えば、あのナーガールジュナ「竜樹」の異名である。ほかにも竜勝、大竜などと呼ばれた。

大乘仏教の理論的主柱とうたわれた竜樹菩薩だが、馬鳴と並んできわめて伝説臭の濃密な仏者である。いや大乘の菩薩たち、じつは誰を取り上げても伝奇性はつよい。

している。いま朱駒波城内へ現れた「竜猛」が竜樹その人ではあり得ないだろう。ただ竜樹に限らずこの時期、高名な菩薩衆は神出鬼没、各地に現れている。原因は大乗教団の拠点が地下組織もどきで明確さを欠くためである。絶対に現れなかったとも断言しきれない。

それはともかく少年サビヤと老女カナウジは夜明け前に朱駒波城へ到着した。城門の不寝番は老女の顔もだが、二十歳になったとは言え小づくりで童子の面差しを失っていないサビヤを全く疑ぐろうとはしなかった。

ウルヴァジー王妃は宮廷内で「駱駝夫人」と呼ばれていることを少年サビヤは翌日の面接で知った。昨夜からさんざん話題にしていたのに老女はついぞ口にしなかった愛称だった。それがいきなり「バイール」(駱駝)と呼ばかけたのだ。

王妃は二十七か八、肌は透明で瞳の色も青く澄んでいた。西方の国の出身であることは

明らかだった。

「あなたもギリシャっ」

駱駝夫人はサビヤの顔を覗きこんできた。

少年の瞳も青味がかっていた。

「さあ……でも母の話だと二代だか三代前の祖父がギリシャ人だったということですよ」

肌色は半褐色、毛髪は黒、瞳は青く、少年サビヤの肉体には小アジアを取りまくさまざまな民族の血が混じっていたようである。

「わたしにはこのカナウジのような乳母がいたんですよ」

ギリシャの都市で育った駱駝夫人は短い会話のなかで彼女の半生を物語っている。砂漠の女を傭って乳母とする制度は文明都市国家独特のものであったのである。それを、のっけから物語りだすことで駱駝夫人は現在の境遇への不満を訴えようとするのか。

(つづく)

舞見御中

鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 〒248 鎌倉市長谷四―二二八	愚鈍院住職 中村 真道 〒980 仙台市新寺三―二一七 テレホン法話(〇二二)九九―〇九〇三	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤 順底 〒020 盛岡市南大通三―一一四九	大原山 西福寺 鵜飼 隆玄
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部 仙順 電話(〇三)八二―三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口 善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺	西住院 戸川 靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松 濤弘道 〒328 栃木市万町二―一四 電話(〇二八)二二―〇八〇二	芳泉寺 柳 楽真純 なぎ ら しん じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗教学局長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七)三二―三三―四〇〇〇	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三)五二―五五六六

舞見御中

無量山 伝通院 住職 吉川 哲雄	九品寺住職 漆間 純成 〒530 大阪市北区同心一―四―八 電話(〇六)三五―七六八二	回向院住職 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇	九品仏浄真寺 清水 順碩 東京都世田谷区奥沢
おてらはみなさんのそうだしよ 桜と観音さまのお寺 正念寺・是田寺 浄心寺 小池 政雄	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二六―五二二五	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区南青山二―二六―三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六―二 電話(〇四四)二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸寺 原口 徳正	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒05 花巻市双葉町六―四 仏教福祉センターよるひる銀行	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺住職 楠美 知行	光運寺住職 飯田 信弘 〒510 四日市市中部三―一二

舞見御中署

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―二―四七 廣隆寺内	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二―五―一
お骨仏の寺 一心寺 貫主 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七一―〇三七二(代)	摂取院住職 聖徳保育園長 金子貫達 〒850 長崎市錢座町四―五九 聖徳寺中	浄土宗議會議員 光明寺住職 山口諦存 〒673 明石市鍛冶屋町五―二〇	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	大松寺 〒108 東京都港区三田四―一―三八	浄土宗東京事務所長 鯨淵正浩 〒320 宇都宮市堀田二―五―一 浄鏡寺

舞見御中署

萩市 常念寺

古本 超然

稲田 稔界

祐天寺

巖谷 勝雄

遍照院

宇佐美 諦練

〒461 名古屋市中区泉二一九一—二三

大本山光明寺執事長
西念寺住職

北邨 謙順

〒500 南足柄市沼田三一五

北川 一有

長寿院

〒110 東京都台東区鳥越二一三—一八

法然上人二十五霊場
第二番仏生山法然寺

細井 俊明

雲心寺

桑山 春山

〒456 名古屋市中区尾頭町三一—一九

寺内 大吉

教育図書 大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋一—一一—六
電話(〇三)二六二—五九四四

法然上人鑽仰会

同人一同

維持会員一同

会員一同

木彫像・欄間・一品作



千手観音像

天地八尺

桧 材

24K仕上げ

真心値

山形渡し ￥270万

有限会社 源 田

▶ ご一報下さればご相談に応じます。

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄 土 五十巻 八月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年七月二十五日 印刷
昭和五十九年八月 一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒 一〇三 振替東京八一八二一八七番

舞見御中暑

法主 林 靈 法 大本山 百万遍知恩寺	法主 稲岡 覚 順 大本山 金戒光明寺	法主 中村 康 隆 大本山 増上寺	門主 藤井 実 応 総本山 知恩院
法主 一条 智 光 大本山 善光寺大本願	法主 藤吉 慈 海 大本山 光明寺	法主 一田 善 寿 大本山 善導寺	法主 江藤 澄 賢 大本山 清浄華院

人生は旅。巡礼も旅。道たどれば心さやか



慈悲にふれる

暑中御見舞申し上げます

中国 33 観音霊場会

会長 小林海暢
札所寺院住職一同

事務局 岡山市西大寺中 3 丁目 8 - 8 ☎ (08694) 2 - 2058